

---

# 君はアイドル

レオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君はアイドル

### 【Nコード】

N8327Y

### 【作者名】

レオ

### 【あらすじ】

星に誘われて、今、話題沸騰中のベルガク工房のコンサートに行くことになった癒菜。

コンサート会場はうるさくて、外に出た癒菜。

そこで、ある人に会って・・・?!

## \* 第1話\* (前書き)

連載2作目です♪

更新速度、遅くなったらすいません(汗)

第1話、ご覧くださいますませ♪

### 登場人物

- ・東堂癒菜<sup>とんだつゆな</sup>・・・高2、クールな性格
- ・星空季唯<sup>せいくつきい</sup>・・・高2、元気満タンの可愛い子
- ・ベルガク工房のメンバー(計5人、全員高2)  
おりはられい
- ・折原零<sup>しらかこう</sup>・・・リーダー、俺様、ボーカル担
- ・白田皇<sup>なかいしろう</sup>・・・副リーダー、草食、ボーカル担、ギター担
- ・仲居翔<sup>あらいしん</sup>・・・メンバー、ムードメーカー、ドラム担
- ・新井真<sup>いさからい</sup>・・・メンバー、子供っぽい、ギター
- ・井坂雷<sup>いさからい</sup>・・・メンバー、DS、キーボード担

## \* 第1話 \*

「癒菜！ ツツツ」

読書しているあたしに走って近付いてきたのは  
ツインテールの可愛い女の子。

名前は星空季唯<sup>せいくつきい</sup>、高校2年生の元気満タンの子。

ちなみに、あたしは東堂癒菜<sup>とうどうゆな</sup>、高校2年生のよく

「クールね」って言われるような性格らしい。

「星<sup>せい</sup>、ドジして扱<sup>さく</sup>けたりしたら、危ないよ」

「大丈夫！ ったあ！？、うわあっ！！！」

ドスツと鈍い音がして、次には「いたあっっ」って言う  
星の声が聞こえた。

多分・・・いや。絶対にものすごく痛い、と思うんだけど

「予告したにも関わらず何やってんの・・・。」

「いやあ、ごめんごめん」とまあ、確実に次は気をつけようとか  
言う

注意書きは星の頭に無いみたいだね・・・（苦笑）

「あ！でさでさっ！癒菜、明日用事とかない！？」

「別にないよ」

「あのね！明日、ベルガク工房のコンサートであるの！でね！  
そのコンサートに、わたし、あたっちゃったんだあ！」

「そうなんだ、よかったね？」

別に特に興味をもっていない私からすれば  
どれだけ親友でも正直どうでもよかったりする。

「本当によかったあっ！あ、それでね！そのコンサートのチケット  
2枚あるから

もう1枚癒菜にあげるからついてきてほしいのっ」

「は・・・？なんであたしまで・・・」

「いやあ・・・ほら、私すぐ迷子になってなにがなんだかさっぱり

になっちゃって・・・」

「はぁ・・・。ほんと、世話の焼ける子ね？ま、いいよ、ついてってあげる」

「やったあっつ！癒菜って本当いい人！最高！ダイスキッ」  
そういつてガバツと抱きついてきた

黒いツインテールがあたしの首に当たてくすぐつたい

「星、くすぐつたあい・・・。つか、くるしいっ」

首にがっしり手を絡ませてるもんだから、苦しくて仕方ない

「へへえんっ掛かったなあゝ！」

「わ、わあつかった！何をおのぞ・・・う・・・」

あたし、撃沈。

苦しすぎ・・・。

「あれ、癒菜がしんじやつたー（笑）」

「んもー・・・馬鹿星・・・星へ帰れーっ」

こんな感じで、あたしは明日、ベルガク工房のコンサートに行く事になった。

**\* 第2話\* (前書き)**

第2話ご覧くださいませ♪

## \* 第2話 \*

「癒菜、ごめえーん！まったあ〜？」

「大丈夫、あたしも来たところだよ。」

「そっかあ！じゃ、よかった！！さてと！いこっか！」

今日は星に誘われてベルガク工房のコンサートに行くんだけど正直、興味ないあたしは多分詰まんない顔だと思う・・・  
ま・・・星は素でばけてるから気付いてないけどね

「ね！癒菜！今日の服どう思う？」

「ん？可愛いと思うよ？星っぽく、キュートだし」

「やつぱり？？よかったあ！わざわざ買った意味アリアリだあ〜」

ニコニコしながら首をブンブンとなぜかふりながら嬉しそうにしゃべる星。

まあ・・・こう言うのがあるから、憎めない・・・んだよ

てか、隣にいるからそのツインテールがあって痛いんだけど・・・

「星、痛い」

「え？あははっ！ごめん〜！てかさ、癒菜の服

クールで大人でいいなあ〜っ」

あたしの服を見て、うきやきやと喜ぶ星。

これのどこをみていいなあと言ったのかさっぱりだ。

黒縁のダテめがねに制服のカッターシャツに縞模様のネクタイ

黒いスキニージーンズにハイヒール、髪の毛は下ろしたまま。

すぐくすぐくすぐく、普通なんだけど・・・

「しかもー！セクシィッッ」

星が目ハートにしながら、あたしの胸元をみた。

いつもの癖で、カッターシャツのボタンを4個目ぐらいまで留めていなかった。

まあ、下着が見えるわけでもないけどさ

「これ、セクシーなの？　と言うか、ついたけど・・・」

星がえ！？　といわんばかりに振り向くと

案の定、人にぶつかるわけ・・・でね

「ご、ごめんなさい！」

「んも、気をつけてね？」

優しそうなおねえさんだ。

ファッションは星と似てるかな？

「おねえさん！　その服、どこで買ったんですか！？」

「え・・・？　これ、手作りよ？」

「そうなんですかあ！？　すごいすごい！　その作り方おしえてくださあい！」

おいおい・・・ここで言うか・・・

そんなもの断られるに決まって・・・

「いいわよ！　あなた、座席どこかしら？」

「アリーナ席の。・・・です」

「あらあ！　私とお隣ね！　ラッキーだわ、あなたみたいな子が横で  
」！

さ！　いきましようか！」

「はい！　癒菜、いこ！」

・・・。

何故こうなったのかあたしには不明すぎる・・・。

星の人見知りしなさすぎる性格には「あ」もいえない・・・

会場に入ると、ざわざわ、がやがや、うるさいったら・・・

あたしはうるさいところが結構苦手・・・。

席に着くと、星と比奈さん（さっきのおねえさん）は

すでに服のはなしとベルガク工房の話で大盛り上がりだ

「ごめん、星、あたし外のカフェにいるね？」

コンサート始まってもしないかもしれないけど、放っておいていい

から」

「うんゝわかつたゝ！あ！それでね――」

なんて薄情な子だ・・・

まあ、いいんだけどねえ

外に出ると、もうほとんど人はいなくて

カフェなんて誰もいなかった。

「いらつしやいませ、ご注文お決まりですか？」

「コーヒーのブラックで」

「かしこまりました」

やつぱりベルガク工房って人気あるね

えっと・・・

メンバーはおりはられい折原零としらたこう白田皇となかいしゅう仲居翔と

あらいしん

いさからい

新井真と井坂雷だったっけな？

で・・・星がすきなのが仲居翔君だっけ。

そういえば皆、高2なんだよね

なんか、高2でアイドルって多分、てか絶対すごい

こんな事を考えて、多分15分ぐらいたった頃だった

「君、コンサート会場に入らないの？」

不意に後ろで声が聞こえて振り返った

「中はうるさくって、外に出てきてるんです」

帽子を深く被ったその子は、男性なのにきれいな肌で

長身で、顔はアンマリ見えないけど、世間で言うイケメンと言うも

のだと思う

「え、じゃあコンサート来てる意味って・・・？」

「ああ・・・、友だちが素ボケちゃんで、ドジだから

付き添いみたいなので来たんです。正直、あたしはベルガク工房に

興味無いんで・・・（苦笑）まあ、大体のことは知ってますけど・・・

・って

なんか、すいません。(汗)」

やば・・・長くしゃべりすぎた・・・。

「そういう事ね・・・？って・・・これ零に知られたら、君えらい目にあうね・・・」

「零ってベルガク工房のリーダーですか？」

「うん、そうだよ。あ・・・てか、君僕の事誰かわかって・・・ないよね？」

「ええ、まったく。まず顔、見えてませんし。」

「やっぱりね・・・ま、ファンとかじゃなさそうだから、バラしてもいいかな。」

そういうと、その男性は帽子をひょいと取り、机に置いた

「・・・白田皇・・・？」

そのキレイな肌の男性は明らかにベルガク工房の副リーダー、白田皇だった。

「驚かないね？」

「え・・・ええ、まあ、ちょっと動揺してますけど・・・

てか、なんでいるんですか？後5分とかではじまるんじゃない・・・？」

「なんか今、トラぶってるみたいだね・・・？僕、そういうの苦手です」

「そうなんですか・・・なんか、テレビとは違いますね、やっぱり」

「え？そのやっぱりの意味はなに・・・？」

「ほら、テレビじゃDがつくSですよ？ケド、今、SでもなければMでもない

極普通の男の子って感じで。まあ、テレビ見てたら大抵分かりますけどね？」

「ま・・・キャラ作ってるからね・・・？僕結構が弱いよ」

「男でもか弱いのは仕方ない事ですよ。と言うか、ソロソロいったほうがいいんじゃない？」

もう20分はたってるかと？」

あたしとしゃべってる間に実は時間は大いに過ぎていた

大丈夫なのか、あたしにはまったく不明で・・・

「そうだね、もう行こうかな。ああ、ついでに、君も一緒に来て？」

「は・・・？なんであたしまで？！」

さすがにこの発言にはびっくりだ。

いきなり来いとか・・・つか、ついでってなに？！

「マネージャーにぴったしかと」

「はああ？！」

「アイドルにはあはないでしょうよ？」

なんか、皇君テレビキャラに戻ったし！

「あたし、一般客ですよ？てか、そっちのほうの資格とか・・・」

「大丈夫、資格なんて僕たちでごまかすし。んじゃあ、行くぞ」

やばあ。こいつまじでSだろ！！

「ちよ、まつ・・・。もう・・・。」

あたしは諦めて、拒絶していた状態をやめて

渋々ついていく事した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8327y/>

---

君はアイドル

2011年11月25日20時46分発行